

平成22年 5月31日現在

研究種目：若手研究(B)
研究期間：2008～2009
課題番号：20720031
研究課題名（和文）近世初期日本絵画における粉本使用例の基礎調査
研究課題名（英文）Basic research of Japanese painting's pattern in early modern ages

研究代表者
金井 裕子 (KANAI HIROKO)
独立行政法人国立文化財機構九州国立博物館・学芸部企画課文化交流展室・研究員
研究者番号：10443623

研究成果の概要（和文）：

本件は国内外に点在する、日本近世初期における粉本を使用した絵画作品の基礎調査を旨とする。従来粉本使用の作品は転写本として研究対象から外れる傾向があるが、これらの詳細な比較や分類を行うことは、絵画の制作過程を考察する上で極めて重要であると考えられる。本研究ではこれらの史料的価値を積極的に認め調査を行うとともに、その系統分類を行った。研究成果として、国外作品6件、国内作品10件の計16件について資料が収集できた。今後はこれらの成果を基に、粉本の流通や使用過程、ひいては制作背景について考察したい。

研究成果の概要（英文）：

This research investigates how patterns are used in early modern Japanese paintings. So far, there have been very few researches on them, but this research can reveal the process of constructing art works. I achieved basic researches of 6 overseas and 10 intranational patterns in these two years.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,300,000	390,000	1,690,000

研究分野：

科研費の分科・細目：

キーワード：①16世紀 ②粉本 ③近世絵画 ④やまと絵 ⑤日本画 ⑥土佐派

1. 研究開始当初の背景

室町時代から江戸時代にかけてのいわゆる近世初期は、政治史だけでなく日本絵画史、特に職業絵師たちにとっても転換期であった。それまで土佐派ら宮廷絵所や窪田派その他絵師らという旧来の絵師たちが宮廷や将軍家周辺を中心としたごく一部の受容者層の要望に答えていたのに対し、戦国大名の台頭などより受容者層が拡大、同時に絵画界においても狩野派や長谷川派、その他町絵師といった新興勢力が台頭した。

しかし絵画における「新興勢力の台頭」とはいうものの、旧来の勢力に割り込むには顔料を中心とした画材の調達や、人材の育成と工房の作成、粉本の入手などといった様々な問題を克服しなければ難しい。従来の研究ではこれらについて、絵師と当時の権力者との関係という政治的な文脈を通じて解釈が試みられてきた。確かに、狩野派や長谷川派は巧みに権力者に取り入ることでこれらの問題を一つ一つクリアしたと思われるが、町絵師の爆発的な増加については同じ説明を充てることは難しい。文書や古記録等の史料による検討は不可欠であるが、その一方で、伝来や史料の残らない作品や無落款の作品、作者がわからぬまま「町絵師」という言葉で片付けられている膨大な作品群が研究対象から外れているのが現状である。これらの背景には、先に挙げた史料重視の研究体制に加え、美術史に根強く残る優品優先主義が考えられる。芸術として優れた、独創性の高いもののみを研究対象として用い、粉本を使用した作品を二級品として研究対象から遠ざけるという傾向は否めない。

2. 研究の目的

本調査ではこれらの現状を踏まえ、特に粉本の流過程と使用法に注目することで、新興絵師がいかにか旧勢力の中に進出していったかを、制作過程のレベルで明らかにすることを目的とする。具体的には、どのように粉本を入手し使用したかを、従来美術史研究の対象から外されていたレベルの作品を含めて網羅的に調査し、図様の継承を丹念に追うことで、従来の史料論や様式論に依存しない、粉本利用の新たな側面を見だし、新興勢力の台頭の主因を再検討したい。これにより、流派の互いへの影響関係や接点、経済的支援者との関係を見直すことで、当時の絵師をめぐる文化的ネットワークの存在が新たな角度から明らかになると考えられる。

3. 研究の方法

本研究は、粉本と素材という制作者視点の二つのキーワードを用いて、近世初期の絵画の制作実態について迫るものである。研究期間内では、以下について考察する。

(1) 国内外に分布する従来研究対象から外されつつも史料的価値の高い作品を整理する。特に、近似する図様を持つ作品群に注目し、粉本使用の可能性について思索する。

(2) 様式判断や絵画史上、文化史上の意義、歴史的背景を鑑みながら、作品群の史料的価値を再評価する。

(3) 上記調査結果を踏まえ、作品群の背景に横たわる画壇のネットワークを考察する。

本研究は、粉本資料の収集と分析という大きな柱を基に、制作者視点にたった作品の比較分析を行い、近世初期の絵画の制作実態について迫るものである。その特色は大きく三点挙げることができる。

第一は、研究視点の設定である。美術史として一般的な、図版と文字史料による作品の識別といった「鑑賞する側」の視点中心ではなく、粉本と素材に注目した「制作する側」の視点を導入することで、従来から異なる情報を作品から引き出すことを試みる。

第二は、研究対象の選定にある。従来、文字史料の欠如や芸術的完成度の低さから研究対象となり得なかった作品に注目し再評価することで、その史料的価値を積極的に見出す点が挙げられる。

第三は、科学的な研究手法である。本研究は作品の厳密な測量と、顔料や紙などの分析を含めた詳細な調査を基盤とする。また測量結果は、作品の描線をデジタルライン化することで、データ上からの客観的な作品比較に活用し(下図参照)、顔料等の分析結果は、その流通経路の解明も含め、作品成立の歴史的背景考察の一助とすることが挙げられる。

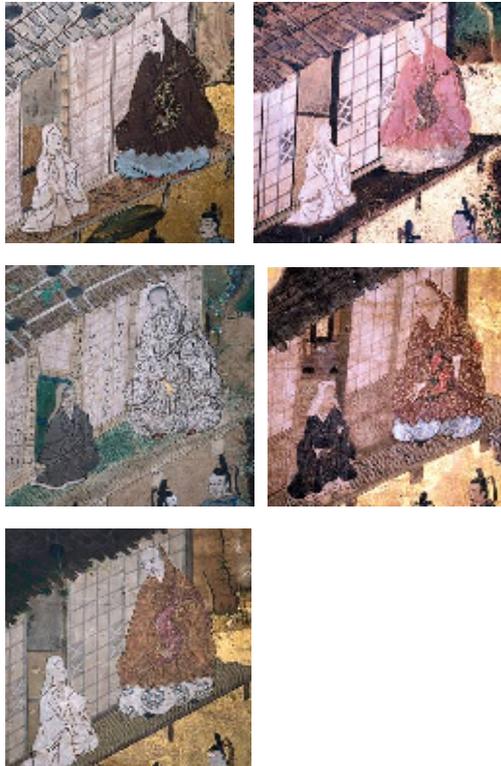
この研究の意義は、大きく二つに分けられる。

第一点は、従来研究対象から外されてきた国内外の作品の史料的価値を積極的に認め再評価することで、近世初期に関する情報をより広く得ようとする点である。このことは、文字史料の欠如した作品からでも情報が引き出せる新たな作品分析方法の確立を意味する。

第二点は、粉本の使用度をデジタル化するならぬ数値化することで、同時に素材分析からその流過程を追うなど、従来の主観に依存する様式認識ではなく、新たな科学的視野を

取り入れる点にある。

これらの二つの新しい情報収集方法の導入することで、混沌とする近世初期の絵画制作事情に新たな視点が設けられ、ひいては同時代の画壇における新しいコミュニケーション・ネットワークの発見に繋がると思われる。



挿図 作品の粉本使用を示す一例

4. 研究成果

本研究では、国内外に分布する史的価値の高い作品の存在を確認・整理し、その中で特に粉本使用の調査に適すると思われる作品の基礎調査を行った。このうち申請者が特に注目するのは、現在日本国内外で10点確認されている「大原御幸図屏風」作品群と、「三十六歌仙図」「帝鑑図」の存在であった。

「大原御幸図屏風」は『平家物語』『灌頂巻』を絵画化したもので、後白河法皇と建礼門院の対面を描くものであるが、現在これらを屏風装にした作品が複数の流派にまたがって10点以上確認されている。同一画題においてほぼ同様の図様を継承する屏風は現存例がほとんどないため、これらを詳細に分析することは、16世紀における粉本使用を考察する上で最適な資料であるといえる。

申請者は今回、国内5件、国外1件の「大原御幸図屏風」の詳細な調査と分析を行い、

本作品群に粉本使用の明確な痕跡がみられること、その共有には長谷川派、狩野派、土佐派といった、室町末期から近世初期の名だたる流派が関与していたことを改めて指摘した。

また「三十六歌仙図」については、15世紀中頃から急激に流行した神社への「三十六歌仙扁額」の奉納を題材として、現存する宗像神社本（福岡）を調査し、多賀大社本（滋賀）、出水神社本（鹿児島）などと比較をすることで図様の継承と伝播を追うことができた。

当初より予定していたこれらの調査に加え、ニューヨーク・メトロポリタン美術館が所蔵する「源氏物語図屏風」や太宰府天満宮所蔵「北野天神縁起絵巻」や福岡・鳥飼八幡宮所蔵「天満宮縁起」なども調査を行い、屏風だけでなく絵巻における粉本の使用例についても考察を進め、成果を挙げることができた。

これらの調査成果の一部は、2008年度九州国立博物館開催の特別展「国宝 天神さま」において公開し、同展覧会図録に結実させた。またシンポジウムにおいてその成果を報告している。

また本資料に関する考察については、次年度以降に逐次、研究成果を公刊していく予定である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

金井裕子「室町～江戸期における『北野天神縁起絵巻』の制作」（「国宝 天神さま」関連イベント講演収録集 2009年160p-169p、査読なし）

金井裕子「保存修理経過紹介」（特集陳列カタログ『博物館と文化財修理』2008年、20p-23p、査読なし）

金井裕子「北野天神縁起絵巻」（特別展「国宝 天神さま」展覧会図録 2008年、199p-203p、査読なし）

〔学会発表〕（計1件）

金井裕子「室町～江戸期における『北野天神縁起絵巻』の制作」（「北野天神縁起絵巻シンポジウム」、2008年10月25日、福岡・九州

国立博物館)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

金井 裕子 (KANAI HIROKO)

独立行政法人国立文化財機構九州国立博物館・学芸部企画課文化交流展室・研究員

研究者番号：10443623